玄洋社関係史料の紹介

石瀧　豊美

第58回

同時代から見た頭山満 ②

ー書と人物ー

昨年、四月十五日、鹿児島の西郷南洲顕彰館で「西南戦争と玄洋社の誕生―南洲翁と玄洋社」というタイトルで話しました。その時、会場に来られていた松浦彬さんから話しかけられたことが、私の頭山満研究に大きな示唆を与えるものでした。頭山満とは何者か。これが私が四〇年近く考え続けていることです。少なくとも戦後の頭山像は間違っています。間違っているだけではなく、正反対に理解している。これが裁判ならば無罪の人物を有罪にしているようなものです。

私が玄洋社研究に着手した当時、進藤一馬さんを初め、頭山満とじかに接した方々は多くご存命でした。頭山満の外孫に当たる筒井楠雄さんのお姿も思い出されます。その時点で私の理解が浅く、かんじんのことを知らないまま時日を過ごし、貴重な証言を得る機会を失いました。頭山満とはどういう人物かを知るには、戦後の研究は当てにならない。そこで、偏見なく頭山に接した人たちの証言をできるだけ集めることにしました。松浦さんが私にもたらしたものが、私の思いに答えてくれることになりました。

松浦さんの恩師にあたる奥田栄穂さんが、昭和十四年に頭山邸（渋谷区常盤松）を訪ねたところ、あいにく御殿場の別荘で療養中でした。そこで奥田さんは翌日、御殿場に向かいます。そもそも鹿児島から上京した目的が「数年来敬慕し念願していた頭山満翁にお会いするため」だったのです。「この時の私の服装は、上下共にカーキー色の国民服に下駄履き、無帽、蓬髪、不精のアゴヒゲを生やした田舎青年の姿。片手にトランクを下げていたろうか。紹介状なしでも、ただ真実一路の体当たり覚悟であった。」とも書いています。

奥田さんは鹿児島県の小学校の教師でした。紹介状も持たず、ふらりと訪れた無名の青年に気楽に会うのが頭山満です。部屋に通された時のことはこう書かれています。

「玄関の間の横の廊下を過ぎた次の間に通される。居間兼客間であろうか。十二畳位の広さであった。左側の縁側の先は中庭、その向うの夏空の下にくっきりと雄大な富士山の麗姿が浮かんでいるのには度胆を抜かれる思いがした。座しながら富士山をこんなに近くに眺めたことは初めてであった。主人公の頭山翁は床の間を背に袴姿で端然と坐しておられる。みごとな白髯をたらしたお顔は写真で想像していたとおりであった。数え八十五歳のご高齢ながら、その悠然毅然そして脱俗のご容姿は窓外の富士山の麗姿と併せ見るとき、正に『英雄頭を回らせば即ちこれ神仙』の感を抱かせられるものがあった。」

頭山満はその五年後、昭和十九年に亡くなります。奥田さんはさらにその五十年後、平成六年にこの回想録を残しました。それを松浦さんがワープロに打ち直し、私にもたらして下さったのです。奥田さんが頭山満との会見のもようを書き記した理由もわかります。

「頭山翁に親しく接した人は、その近親者や近辺の方々は別として、日本全国にも今や数少なくなりつつあろう。私がお会いしてからちょうど五十五年、その没後正に五十年という節目の年に当たり、どうしてもこの『訪問記』を書き残しておかねばという意欲が、今夏になって湧然と湧いてきたのである。六十有余年来の景慕の念は到底筆紙に尽くし得ざるものあり、駄文拙文まことに忸怩たる思いであるが、意のあるところをご推読いただきたい。」

奥田さんは自分の記憶の中の頭山満を、「どうしても…書き残しておかねば」という思いにかられて、文字として定着したのでした。「平成六年八月三十一日　稿了」とあります。奥田さんと接している内に、この一年間、一字も書くことのなかった頭山が自ら揮毫をしようと言い出します。目の前で書かれた書は軸装して奥田家に伝わっています。

「天下紛々亂如麻錬磨肝膽獨成仁」（天下紛々、乱れて麻の如し。肝胆を錬磨して、独り仁を成す。）

これは西郷隆盛の詩の半分だと、頭山は奥田青年に説明します。ところが奥田さんが見ると、二字足りませんでした。そこで後で書き加えたのが右下にはみ出している「肝膽」の二字です。頭山はその詩をそらんじていて吟じます。そして次のように語りかけます。

「『わたしの書もこの頃は少しは値がするらしく、大分偽物が出回っているそうじゃ。この悪筆を真似するのもさぞ骨が折れることじゃろう。だがあんたのこれはまちがって書いてあるから、まさかまちがいを真似する奴はあるまいから、かえって本物と判ってええ。』正に達人の達言、天衣無縫の神人の真言を聞く思いがした。」

頭山満の面目躍如。奥田さんの証言がたいへん貴重なものであることがわかります。それとともに、頭山の書の贋物が「大分…出回っている」ということを、本人も承知していたとは！

奥田さんの長兄も大正十三、四年頃に書を書いてもらっています。お兄様は同十五年に二十五歳で亡くなられたそうです。「淡如雲」（淡きこと雲の如し）の扁額です。こちらは現在、串木野市の冠嶽山鎮國寺（真言宗、村井宏彰師）に奉納されています。

頭山満と自署した掛け軸と、立雲と自署した扁額。どちらも本物に間違いありません。偶然どちらにも「如」の字が現れ、筆跡はそっくりです。

「いよいよ揮毫の始まりだ。硯箱の中には小筆が一本しかない。その小筆を執って穂先の中程をちょっと歯で噛んで水に浸される。すぐ袴の膝頭を少し開いて半折紙の上に跨いで左手で体を支えて、右手の小筆を墨につけて穂先の根元までグシャッとつぶされたのには驚いた。ドボッとつけた小筆の先から、第一字を書かれる前にポタリと墨滴が紙面に落ちた。ヤレヤレと顔をしかめた私、恐らく女中さんもそうだったろうが、ご本人は全く平気の平左。第一字から半分あたりまでさらさらと一気に書き下ろされた。」

掛け軸は八十五歳の時の作品とわかっています。高齢で、病気療養中でもありました。しかし、気力は壮年のように充実していたのでした。

※資料をご提供いただいた、奥田満子様、松浦彬様、村井宏彰様のご芳情に深謝します。